

れていないため、全て同様に集計している。したがって、児童居室にて『児童-地域』の関わりがあると回答している施設には、施設内児童およびボランティアのみである施設も含まれているために集計結果で得られた25.1%という割合より減少するものと考えられる。

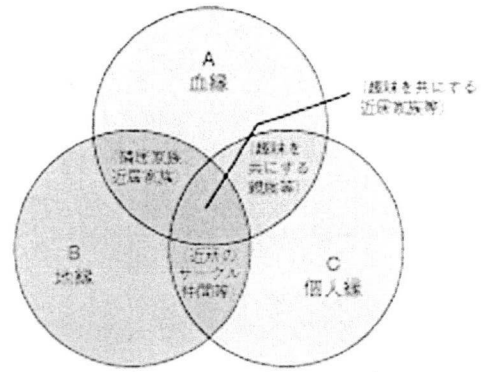
施設外では、児童の遊び場として多くの施設が回答した公園や行事の開催場所、学校や幼稚園、また、友人宅に遊びに行くことが主となっている。また、児童会館などの地域の公共施設の名前があまり挙げられなかったが、これは施設が立地する周辺環境としてそのような公共施設が少ない、または児童が遊びに出かけ、職員が把握していないなどの理由が考えられる。

ここで、質的視点から『児童-地域』のアクティビティにおける関わり方をみてみよう。

生活圏における交流が、交流相手との関係から「血縁」、「地縁」、「個人縁」に分類ができ(図2.2.4)、血縁では生活の質に関わるサポート関係をもつことが多く、交流において血縁→地縁→個人縁となるに従い個人による選択性はより高いものになることが明らかにされている(浅沼、2009)

ここで述べている「地縁」「個人縁」は『児童-地域』でも同様に考えることができるだろう。同じ地域に住むことによる関わりおよび個人縁の活

動を通じてできる関わりである。



A 血縁：血の繋がっている関係にある家族や親族  
B 地縁：同じ地域に住むことによってできた縁故関係  
C 個人縁：個々人の社会活動を通じてできた縁故関係  
※3つの縁はそれぞれに重なり合う部分が存在する。(一例を图示)。

図2.2.4 血縁・地縁・個人縁の関係(概念図)  
(浅沼、2009より)

この2つの関わり方に着目し、『児童-地域』のアクティビティを図2.2.5のように整理してみた。アクティビティの傾向の順は、そのアクティビティを行うときの関わる主体が団体や集団なのか、または個人もしくはその集合なのか、および関わる内容に関して、どれだけその団体または集団に広く共有されているかという2つの視点で決定している。

集計より得られた8つのアクティビティは、大きく分けて「遊び・買い物・学習・スポーツ・挨拶など」で「個人縁による関わり」に、「スポーツ・挨拶など・行事など・子ども会・地域活動」で「地縁による関わり」

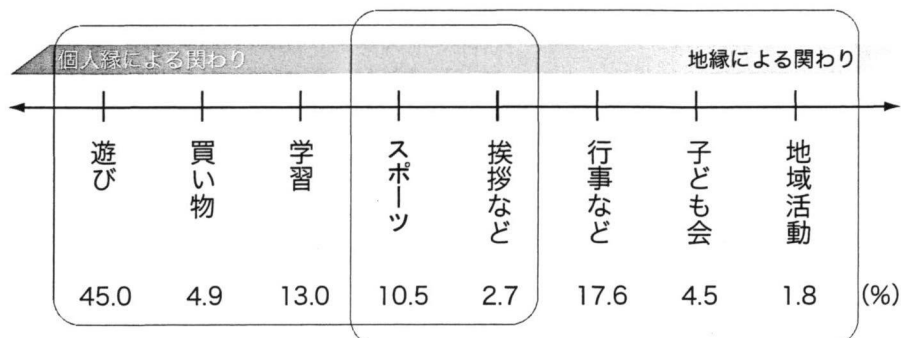


図2.2.5 『児童-地域』のアクティビティにおける関わり方の傾向

縁による関わり」にグルーピングした。スポーツは部活などによる関わりと地区のスポーツ大会などによるものがあり、また挨拶などに関しては、友人の親など個人的な関係によるものと隣人や行事参加者など住む場所に深く関係しているものがあつたため、両方のグループに属している。

2つのグループを比較すると、個人縁による関わりの方が割合が大きく、またその頻度も比較的多く、日常的または定期的に行われているといえる(表2.2.2)。しかし、その一方で、地縁による関わりの内訳をみると、その内容は多様であり、施設の工夫やその地域の特色がみられる。また、関わる集団の規模が大きいものもあり、複数の人

と関わることもできるのも特徴である。頻度はさまざまであるが、季節によるものや年数回という頻度のものが多いが、これは集団的なイベントや一過性の行事がほとんどであるためであろう。

## (2)『職員-地域』の関わり方

『職員-地域』については、本研究における調査にて行ったアンケートが基本的には児童の生活を対象としたものであつたが、少数ながら職員と地域の関わりと捉えられるものがみられたので、分析項目として設けている。得られた回答数は30であつた。詳細は付録：資料編に掲載している。

『職員-地域』の主なアクティビティとしては、

表 2.2.2 個人縁による関わり方と地縁による関わり方

		具体的な内容	場所	相手	時間・頻度
個人縁による関わり	遊び	/	園庭 公園	学校などの友人	帰宅後、自由時間 など自由
	買い物		スーパー 商店	学校などの友人	外出時間内
	学習		施設内 塾	学習ボランティア 塾の先生	週2-3日など
	(スポーツ)		部活 少年野球	同じグループの仲間	部活時 週末など
	(挨拶など)		部活、習い事	部活、習い事 などの知人	部活、習い事の時
地縁による関わり	スポーツ	スポーツ大会 球技大会	グラウンド 体育館	児童館の児童 地域住民	年1-2回など
	挨拶など	日常の挨拶 回覧板を届ける 隣人の犬の世話	通学路 家周辺	隣人	出かける時 遊びに行く時
	行事など	地区祭り 地区運動会 ラジオ体操	神社 運動場 福祉施設など	町内会 地域住民	年3-4回など
	子ども会	子ども会活動 地域交流事業	公園 地区子ども会	子ども会	月1回など
	地域活動	地域清掃活動 廃品回収 防災フェア 雪かき	住宅周辺 公園 海岸	地域住民 隣人	年1-2回など

地区清掃などの、児童と一緒に職員も主体的に参加するような地域行事、また、その協力や手伝いとして参加する形が挙げられた。中でも、多く回答されたのは施設が主催する行事である。バザーやクリスマス会などの施設行事への招待や交流事業を積極的に行い、地域との交流を図っている施設もあった。その際に関わる相手としては、参加する地域住民のほかに、施設運営協力者、学校関係者、地域団体、児童民生委員などの関係者が主であった。本園・分園、周辺環境、建物構造などの違いについては、総数が少ないため結果に信頼性はないが、この調査では特に差異はみられなかった。

### (3) 『児童-職員』の関わり方

『児童-職員』は施設において日常的に関わっているため、ここでは施設的环境による質的な違いを分析する。児童および職員の施設での日常生活の展開の施設形態による違いについて、以下のよう

に指摘されている（石垣、2008）

児童については、生活行為の行われる範囲が、小舎制ユニット型施設（以下、ユニット）とグループホーム（以下、GH）では生活グループの中に留まっているのに対して大舎制施設では食事、入浴といった行為が他の生活グループと共に、場を共有して行われていた。また、自由時間など夕方以降の滞在場所に特徴が確認された。大舎の児童は居室や居間、学習室、その他の施設内に広く滞在していた。ユニットでは児童居室の利用は就寝時が主であり、児童は行為を共有するしないに関わ

らず食卓や居間、和室に皆が滞在することが主であった。GHでは両方が確認された。

職員は、大舎ではひとつの場に留まって過ごすことは少なく、施設内にわたって仕事が行われていた。ユニットでは大舎に比較すれば生活グループ内での滞在が多いものの、職員間の連絡や見回りなどで生活グループ外への出入りも確認された。GHでは施設空間が限定されており、また他の生活グループを職員がみる必要がなく、最も滞在場所が固定的であった。

（一部抜粋）

ここでは、本園・分園、周辺環境において、各アクティビティ、またその場所や頻度に着目して分析を行う。

まず、本園・分園についてである。図 2.2.6 に『児童-職員』について、各アクティビティごとにみた回答数とその割合を示している。なお、就寝、入浴、遊びでは、図の（ ）内にて示しているように、アクティビティそのものではなく、低年齢児に対する補助的な役割（就寝時の添い寝、寝かしつけ、入浴時の介助、遊ぶ時の見守り）を含んでいる。

図より、本園における児童が職員と共に行うアクティビティより分園の方が割合として多く起こっているのは、食事、学習、就寝、洗濯、買い物であった。本園、分園ともに共通しているのは、掃除、洗濯を児童が職員と共にを行う機会が非常に少ないことである。両アクティビティともに、「児童が各自で行う」、「中高生は各自で行う」、「下洗

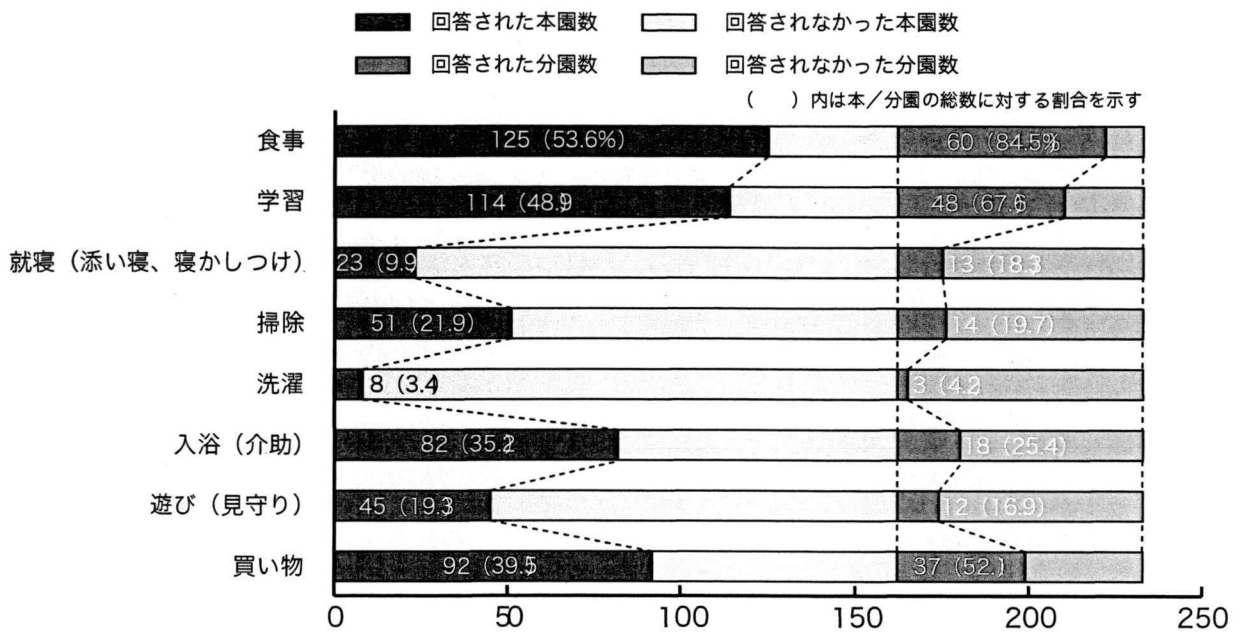


図 2.2.6 『児童-職員』のアクティビティにおける本園と分園の違い

のみ児童がしている」、「職員は仕上げをしている」など、児童が自ら行う、または自ら行った後に職員がサポートをするという形であることがわかった。

また、特徴的であったのは、食事において、手伝いや調理体験として「調理を一緒にしている」と回答している施設が全部で6施設あったが、そのうち5施設は分園であった。その他多くの施設では職員または調理師に任せていた。分園ではほとんどが6名前後を定員としており、また、調理場（キッチン）が一般家庭と同様の設備を備えている所が多く、大きな厨房で調理している大舎の本園施設に比べ、児童に調理を手伝わせる機会が増えるものと考えられる。これは就寝についても同様なことがいえるだろう。日常生活でのアクティビティの全体の傾向を比較し、本園に比較して割合が多かったのが就寝である。職員一人に対する児童数が圧倒的に少ない分園では、就寝時に幼児や小学校低学年の児童の添い寝、寝かしつけ

をしてあげられる時間的余裕があると考えられる。

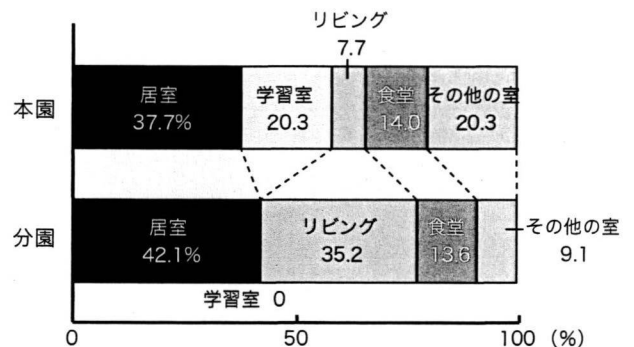


図 2.2.7 『児童-職員』の学習空間における本園と分園の違い

図 2.2.7 に学習空間についての違いを示した。まず目につくのは分園では職員とともに学習空間として学習室の回答がないことである。小舎制という建物構造的に学習室などの空間を設けることが難しいこと、また、児童が6名程度という規模の中では、図からわかるように、居室やリビングなど普段から利用している空間でこと足りるなどの理由が考えられる。空間の使われ方として、児童および職員の滞在場所が大舎に比べ固定的である小舎制の特徴にも合致している。また、本園

ではその他の室において多様な共有スペース（応接室、談話室、事務室、ホール、カウンセリング室、会議室など）が挙げられたのに対して、分園ではホールでの学習を挙げた1施設以外の7施設は全て本園のホール・学習室・児童居室と回答し、学習時間になると本園まで行き、本園児童と共に学習をみてもらうというスタイルがみられた。

周辺環境別では、周辺地域と関係しそうなアクティビティである、買い物と遊びの場所についてその違いをみようとした。遊びについては、ほとんど大きな違いはなく、住宅地に比べ、「河川敷」や「川」など水辺のある場所を遊び場として挙げる傾向が少しあった。買い物については、回答が「(市内) スーパー」や「商店街」など、店名を記すものが多かったため、一概に述べることはできないものの、農村地では「近隣のコンビニ」などの回答が、山間地では「郊外のスーパー」などの回答がみられ、住宅地ではほんの少数しかみられなかった「近い、遠い」などに関する表現があらわれていた。住宅地など環境として生活するものが周辺に整っていると考えられる周辺環境に比較し、買い物などに出かける際に不便さを感じているために出てきた表現である可能性がある。施設の周辺環境が児童および職員の生活にどのような影響を与えているのかについても考える必要がある。

### 第3節 施設がもつ課題の全体構造の把握

#### 3-1. 現状の課題把握と分析方法

##### (1) 施設の現状と課題把握

第1節、第2節において、施設の日常生活におけるアクティビティと空間の関係、関係主体同士の関わりの中で行われるアクティビティの質と空間利用についてみてきた。ここで得られたさまざまなアクティビティが行われている中で、アンケートでは各アクティビティについて現状の改善点を問う項目を設けている。これらの改善点を詳細にみていくことで、地域関係の中で行われる児童養護、およびその基盤となる児童養護施設に向けて現状から、どのような視点を持ち、どのような手法を用いて改善していけばよいのかという知見が得られると考える。

本節では、アンケートで得られた改善点より、施設に関わる人々の行動や施設の環境、プログラムに対する問題、課題がどのような状況のもと起こったのか、その全体構造を把握し、現状の居住環境の課題と可能性を探りたい。

#### (2) 分析方法

アンケートにおいて、各施設の回答者が指摘した全812個の改善点を、KJ法を応用し、分類した。編成作業は、全回答をカード化したものを広げて俯瞰し、内容に親近性のある回答を束ねてカテゴリを作成した。次にそれらのカテゴリ内の回答を読み返し、それらを圧縮した表現を検討して名称をつけ、このまとまりを細分類とした。さらに内容に親近性のある細分類同士を束ねて下位カテゴリを作成、名称をつけた。同様の作業を再び行い、上位カテゴリを作成した。このデータ分析は、改善点の回答結果を意味内容ごとに分け、研究目的にそって主題が明らかになるまで統合し

ている。なお結果の妥当性を高めるために、本研究では分析者に加えて2人の研究者と共に検討を重ね、作業を実施した。また、得られたカテゴリー同士の関連を考えながら、その関連性が分かるように図解化した。この際、その意味の構図のうえに価値判断、評価を加えないように進めている。

## 3-2. 分析結果

### (1) カテゴリー結果とその特徴

全812個の改善点を上記のように分類した結果、9の上位カテゴリー、31の下位カテゴリー、そして48の細分類に分けられた。ただし、内容により、細分類をもたない下位カテゴリーが15ある。なお、812個の改善点のうち、「現在検討中である」「建替中である」など移行期間中であり現状の改善点を読み取れなかった7個および「本園と同じ」「GHと同じ」など改善点が重複することが記された12個の計19個については除いて分類を行った。

次頁より、カテゴリー結果の一覧を載せている。

9の上位カテゴリーごとに、いくつかの改善点を例示しながらその特徴を以下に述べる。

#### [ 家庭的な環境づくり ]

この上位カテゴリーでは、主に生活単位またはその人数を少なくすることが挙げられ、規模やグループの小規模化は食事に関して、少人数化は睡眠や入浴に関する記述が多かった。また、家庭的な環境を整備する工夫としては学習環境面での回答が多く、具体的には「十分なスペースの確保や机、イス、本棚などの勉強する環境を整えたい」

などスペース、備品の整備や「人数が多く落ち着かないので、静かな学習環境を整えたい」などの雰囲気づくりが挙げられた。

#### [ 児童の自立支援 ]

ここでは、大きく「生活体験の機会増」、「積極的な対人関係」、「児童の意識の向上」の3つの下位カテゴリーに分けられた。生活体験は買い物に関して述べているものが多く、「もっと職員と子どもと一緒に買い物にでかける機会がほしい」、また「もっと自由に買い物に行かせてあげたい」など、より自由にできる体制づくりや現状プログラムの改善などが挙げられた。環境・設備の整備面では食事に関して「集団給食になっているため、調理の工程や実際の調理などを体験できない」、「出された食事を食べているので材料の値段や作り方が理解されにくい」などが挙げられている。

また、対人関係では「近所の友達同士の交流が少ない」など施設内の交友関係に留まってしまい、他者と遊ぶ頻度が少ないこと、意識向上では主に掃除、洗濯について「もっと自主的にさせるようにしたい」などの回答がみられた。

#### [ 児童の生活を制限する施設の課題 ]

児童の生活を制限するとは、ここでは施設の空間のつくりや職員の勤務体制などの運営体制によって児童の生活に影響を与えているものを集めており、この上位カテゴリーとしている。例としては、「生活リズムの異なる子どもが複数同じ部屋に寝ている」、「部屋の構成が縦割りなので早く寝る子が安眠できない」、「職員の一人勤務が多く、

学習をじっくりみてあげられない」、「自由な外出を認めていない」、「温かいものを温かいまま提供できない」などが挙げられている。

#### [ 職員の指導・課題 ]

この上位カテゴリーは最も回答数が多くおよそ2割を占めている。その中でも一番多くの回答数が分類された人手不足による課題は、職員の負担増や児童の生活への制限、また外部委託の必要性も指摘されている。管理面、指導面では、児童の安全・衛生面に気を使わなければならないこと、いかにトラブルが起こらないようにするかや、生活習慣、時間など集団生活に必要と考えられることへの指導、お金の管理などの生活体験に向けた指導などが述べられた。

#### [ 個性に合わせた対応 ]

個性に合わせた対応では、年齢・学年、性別、生活リズムなど「児童の特性」、個々の要求や生活習慣の違い、個々の問題などの「児童の抱える問題」、また職員に関して「職員の個別対応力」の下位カテゴリーを設けた。さまざまな問題を抱えた年齢や性別の異なる児童が共に集団の中で生活をする児童養護施設だからこそ、必要な処遇の視点である。

#### [ 空間・設備の不足・要求 ]

施設の空間・設備に関する改善点も回答数が多かった。居室や食堂などの「空間をもっと広くしてほしい」、学習室などの「場所がほしい」とする「スペースの不足・要求」をはじめ、「死角が

多い」、「浴室、洗濯場が離れており、一度外を通らなければならない」など建物の「構造上の問題」を指摘したもの、老朽化や不便さから「設備の更新」を要求したり、保温庫やおもちゃの「備品の不足・要求」などを要求する声もあった。

#### [ 施設と地域の関係 ]

これはほぼ地域との交流に関して回答された改善点の上位カテゴリーである。最も多かったのは「積極的な地域交流」であり、「園が中心となり色々な地域活動を」、「職員が積極的に地域の人と話をしする」など施設から地域に対してアプローチをとろうとするものや「もっと地域の人々に利用して頂ける施設づくりを心がける」など地域の人々の利用をより受け入れようとするものなどさまざまに聞かれた。また、そういった交流を通して「施設理解」を得ようとする意図も読み取れる。「地域との連携」に関しては、「施設職員の専門性をもって地域の子育て支援に貢献していきたい」という児童養護施設の地域子育て支援拠点を目指すような記述もみられた。

#### [ 施設の周辺環境 ]

「周辺環境」では、「地域に子供達と一緒に遊べる広い公園がないため、希望する」など児童の遊び場の不足を問題視しているものや「住宅地なので近くに（買い物に行く）店がない」など買い物の不便さを指摘する回答がみられた。また、「山間部のため、外部との接点がもちにくい」など地域との交流にもつながるような記述や「地域の商店が閉鎖していくこと」など商店街の衰退による

影響の記述もある。

「立地状況」では「地域の中心的な所から離れており、地域交流が難しい」、「地域の定期バスの本数が減っておりアクセスの改善が必要」というように中心部から離れていることによる不便さを挙げている回答もあれば、「都会の真ん中に位置しており自然とのふれあいなど十分に出来ない面がある」と都心に立地する問題も挙げられている。

「地域性」では、「少子高齢化によって周辺から児童が減ってしまった」という回答が目立った。また、「町内会があまり機能していないために地域交流の幅が広がらない」などその地域性について問題視する回答もある。

#### [ 入所前の生活による影響 ]

最後に、「入所前の生活による影響」であるが、これは施設入所前の生活において「学習の習慣がなかった」、「掃除や洗濯の仕方が分からない」ために施設に入ってきてからの生活になかなかスムーズに入れないことを指している。食事、学習、掃除、洗濯、入浴に関して挙げられており、「食事のマナーが定着しない」、「清潔感が育たない」、「整理整頓ができない」、「基礎学力が低く、学習意欲が乏しい」などの回答がみられている。

#### (2) 施設の課題についての全体構造

以上のように分類されたカテゴリをさらに図 2.3.1 のようにその全体構造を図解化した。方法としては、分類された改善点を再び一つひとつ見ながら、示されている改善点についての内容が、「どのようなことを目指しているものか」を指標

として、それを矢印によって表した。矢印の始点が「改善すべき点だと思われること」、終点が「改善することで実現されること」としている。また、丸枠で囲っている明朝体にて記された項目は、カテゴリとしては現れなかったが、「改善によって実現されること」として筆者によって付け加えられたものである。

さらに、図では縦にハード面・ソフト面に分けられたゾーンを設けている。図の上側ハード面のゾーンに位置しているカテゴリ・細分類は主にハード面に関する内容のもの、下側のソフト面のゾーンに位置しているカテゴリ・細分類は主にソフト面に関する内容のものである。

また、横にはそのカテゴリの内容の質的な傾向を示す軸を設けた。図の左側にいくに従ってその内容は課題（原因となっていること）であることを示し、右側にいくに従い実現像（目指していること）であることを示す。この軸における各カテゴリの位置づけについては、矢印の本数、始点・終点の個数を基本として決定し、そこにカテゴリ内の詳細な内容の検討を加えることで決定している。

次頁に全体構造を表した図 2.3.1、続いて図の特徴を述べていく。図解の文章化では上位・下位カテゴリおよび細分類名、筆者による付け足し箇所は「」内に書き表している。また、（）内のアルファベットは図に記したアルファベットと対応しており、図解のどの構造について述べているかを示すものである。





#### 第4節 まとめと考察

本章では、児童養護施設における児童の日常生活のアクティビティの把握のために行ったアンケート調査より、地域の中の児童養護施設についての現状とその実態を探った。

①施設の空間の中には、日常生活において、多様な機能で利用されている空間がある程度特定されてあらわれてきた。それらがあらわれてきたのは主に共有スペースを多くもつ大舎制形態の施設であり、プレイルームやホール、和室といったある程度自由度の高い空間が幼児の食事場所や学習室を備えていない施設での児童の学習スペースなどに利用されている。一方、基本的に空間構成が一般の戸建て住宅などと変わらないGH形態などの分園では、そのような共有スペースが少ないことからダイニングやリビングがそれを担保している。これは入所児童数が少ないために、それほど大きな面積を必要としていないためと考えられる。(第1節)

②児童と地域の関わり方では、その質的関わり方が個人縁によるものと地縁によるものとに分けられた。地縁による関わり方は関わる内容や相手に多様性がある一方で、その頻度にばらつきがあり、傾向としては一過性もしくは年に数回の頻度であった。関わりの発生場所がグラウンドや体育館などの市・区の施設や子ども会の地域団体の活動場などに多く、実際にアンケートでも記述されていたように、地域関係が薄い地域では発生しづ

らい。(第2節)

③施設が抱えている課題構造では、改善すべき点として施設職員が感じていることの中に、物理的またはシステム上の問題を指摘しているケースと将来的に実現したいものを想定したケースとに大きく傾向が分けられた。全体をみると、入所前の児童の生活状態や習慣によって抱えている児童の問題が根本となって施設での日常生活での課題が生まれており、それらを支える形で職員の勤務形態や施設のプログラム、また空間や設備面での課題が意識されている。また、調理場を食卓のある空間に繋がっているかによって調理体験ができたか、周辺の環境によって買い物など生活に不便さを感じている記述がみられ、施設内空間や周辺環境が児童の生活に影響を与えている例がみられた。このような全体構造より、本研究で最も注目すべき部分は、施設の周辺環境と施設・地域間の関係という側面が、地域の中の児童養護のために現在の児童養護施設において課題および目標として捉えられているということである。(第3節)

註)

- 1) 平成21年3月現在、全国児童養護施設協議会調べ
- 2) 施設の周辺環境、建物形態の質問項目に対する複数回答はすべて別々の回答として集計しているため、回答の総数は実際の施設数より大きくなっている。また、グラフは選択肢順に結果を示している。

本章における以降の集計結果、グラフも同様である。

3) 指定管理者制度とは、それまで地方公共団体や外郭団体に限定していた公の施設の管理・運営を、株式会社をはじめとした営利企業・財団法人・NPO法人・市民グループなど法人その他の団体に包括的に代行させることができる制度である。

4) 平成19年度 社会的養護施設に関する実態調査結果より、施設数489カ所のうち370カ所の大舎制の割合。

5) 平成19年度 社会的養護施設に関する実態調査結果より。

6) アンケートの回答には遊ぶ場所と遊ぶ相手を別の質問項目として聞いているため、どの場所において誰が遊んでいるかについての情報は正確に得ることができない。

7) 結果一覧は付録：資料にて載せている。

8) 社団法人全国子ども会連合会による定義。子ども会の会員は、就学前3年の幼児から高校生（相当年齢）までとしており、子どもの集団とその集団と集団活動を支える大人の集団（育成組織、指導者組織）とによって構成されている。平成16年10月現在、121,370の子ども会があり、子ども（就学前3年～高校生）4,397,886人、支える育成者・指導者1,367,678人が加入している。

### 第3章 児童養護における生活体験

#### 第1節 目的と調査概要

##### 1-1. 施設内での生活体験と指導

第2章、第3節において、児童の自立支援充実のために施設の周辺環境、および施設と地域の関係を改善する必要があるという課題構造がみられた。つまり、本研究で着目しようとしている地域との関わり、児童養護施設の周辺環境は、児童の自立支援、つまりは対人関係の積極化や生活体験の機会増を促す基盤であるといえるだろう。

これより、施設での自立支援がその後の児童が社会に出てからの生活に大きく影響しているであろうと考える。本章では、その周辺環境や地域との関わりといった基盤と、児童の生活との具体的な関わりを知るために、施設での生活が退所後の生活に与える影響、また、周辺や施設内の居住環境がどのように影響しているかについて探ることを目的とする。

##### 1-2. 当事者推進団体の取り組みと役割

当事者参加推進団体とは、児童養護施設や里親家庭で生活していたひと、また現在も生活しているひとが主体となり、入所児童への自立支援活動活動している団体のことである。日本では2000年以降、全国各地に社会的養護の当事者活動を行う団体が増えている。また、これらの活動の中には、2008年度から国のモデル事業として始まった「地域生活支援事業<sup>註1)</sup>」を受託している団体もあり、その活動内容は、それぞれの団体ごとの方針によりさまざまである。以下に具体例として、国内と海外の団体をひとつずつ簡単に挙げて

みたい。

##### (1) 事例1：なごやかサポートみらい（愛知）

2008年9月に発足した、愛知県の当事者推進団体。活動内容としては、当事者と里親との交流事業や施設卒業後の就労支援・生活支援の相談窓口の開設、当事者・研究者による社会的養護の啓蒙活動のための支援などを行っている。また、「なごやかサロン」という名称のサロンを設け、定期的に交流を深めるための茶話会も開催している。

ほかにも、名古屋などの地域の児童養護施設には施設の祭りなどイベントがあるときなどに施設訪問事業を行っており、その他関係機関との共同企画の開催や一般家庭への社会的養護理解のための活動もしている団体である。

##### (2) 事例2：Pape Adolescent Resource Centre (PARC)（カナダ）

Pape Adolescent Resource Centre（以下PARC）とは、青少年資源センターと訳され、市内にある2つの児童相談所が、州政府から予算をもらい共同で設置している組織である。カナダはインケア<sup>註2)</sup>を受けていた青少年に対する自立支援内容が最も際立っている国であると言われている（草間、2001）。PARCは「インケアを受けている青少年にさまざまなプログラムを提供し、彼らの自立を促していく」ことを目的に、1986年から始まった取り組みである。PARCを利用するメンバーは友達やソーシャルワーカー、里親などの紹介を受けてきており、曜日ごとに多様なプログラムが用意されている。16歳から30歳代の人々

が自らの好みや関心に合わせて自由に参加できるようになっている。具体的なプログラム内容は、自分の生い立ちなどを書き作成するニュースレターの発行や、さまざまなスポーツを通してレクレーションプログラムを考えて実行する「ユース・リーダー」活動などである。

日本からは1998年に大阪府の児童福祉関係者がPARCに訪問しており、その後も何度か交流事業を行っている。

### 1-3. 調査方法

これまでみてきたように、当事者団体は、団体の方針によってその活動はさまざまであるが、施設に入所している児童、またその退所後の生活に対して、自身らが施設生活経験者である団体メンバーが支援していこうとする団体である。

したがって、当事者団体参加者を対象にして、経験してきた施設での生活、また退所後の現在の生活について聞くことで、より具体的な実態を知ることができる。本調査では、日本建築学会主催の研究会<sup>註3)</sup>にて接点を得て、その後調査に協力して頂くことができたNPO法人日向ぼっこを対象として、そのサロン訪問者に実体験を聞いた。

調査方法は、少人数の対象者に対してインタビュアーが座談会形式でインタビューを行い、その回答（発言）から文脈や反応をみることで分析するグループインタビューを行った。これは、グループインタビューという手法が、語りの中である参加者の発言がさらなる発言へと連鎖的反應を引き起こすこと、参加者は全ての質問に答えるよ

う要求されているわけではないので彼らの反應が自発性をもっていることなどの特性をもっていることをふまえたうえで、当時の生活に関する実体験としてのエピソードをできる限り多く引き出し、その基盤となる居住環境や現在の退所後生活に与える影響を把握しようとする本調査に適していると判断し、採用している。サロン訪問者には、施設生活経験者以外にも施設職員や福祉を専攻する研究者なども含まれていることを考慮し、インタビューをする際の調査グループに対して、インタビュアー（筆者）以外に2人を下限、4人を上限として、かつその中の半数以上が施設生活経験者であることを調査条件とした。

主な質問項目は、

①施設での生活年数や当時の年齢、施設形態や規模などの基本情報について、②施設での食事について、③施設での買い物について、④施設での掃除や洗濯などの身の回りのことについて、⑤地域との交流について、⑥施設での生活経験と現在の生活についてである。インタビューとしては、半構造的インタビューとなるが、これらの質問は会話の流れに任せてその都度提示していった。インタビューを行う前に、児童養護施設での生活が入所児童およびその退所後の生活にどのように関係するのかについて調査していることを告げ、返答したくない場合ははっきりと述べてもらい、それ以上追求していない。そのため、グループ間で聞き取りの深度は異なっている。

調査日程は、2009年12月11日、2010年1月4日および5日の3日間、NPO法人日向ぼっこのサロンにて行った。サロンへの訪問は訪問者の自

由としているため、調査対象者の選定は、調査期間においてサロンに来訪し、調査に協力して頂ける方としている。なお、日向ぼっこの理事長に、事前に調査日程と目的について告知してもらっている。

次頁に、日向ぼっこについて詳細<sup>註4)</sup>を示す(表3.1.1)。

#### 1-4. 調査結果

3日間の調査日程において、インタビューを行うことができた人数は、一日目が3人、二日目が4人、三日目が3人であった。いずれも、先に述べた調査条件を満たしている。ただし、このインタビュー参加人数は一日目に協力して頂いた調査対象者と同様の方を二日目には2人、三日目には1人含んだ数である。

表3.1.2に参加者の特性と各グループのインタビュー時間を整理している。

#### 2-1. 生活体験と退所後生活の関わりの方的分析方法

調査時の会話はICレコーダを用いてすべての語りを録音しており、それより分析対象となるすべての部分を可能な限り実際に近い形で書き起こした。トランスクリプションの表記は以下の規則に従っている。

[ ] : 筆者による補完であることを示す

// // : 重複会話であることを示す

(…) : 会話に間があることを示す

(( )) : 聞き取り不可能な箇所であることを示す

空白の大きさは、聞き取り

不可能な音声の相対的な長さに対応する

((言葉)) : 聞き取りが確定できないときは、当該文字列が(( ))で括られている

このような分析方法により、分析を行っていく。ここで改めて分析の視点を示しておく。本章の論点は①児童養護施設での生活とその地域を含めた環境にどのような関係があるのか、②児童養護施設での生活が現在の生活にどのように影響しているか、である。

作成した逐語録をデータベースとして、論点に関わる箇所を採用しながら次項より得られた結果を記述していく。

#### 2-2. 分析結果

##### (1) 施設での生活の描出

##### i : 生活体験

施設での生活において自らの生活体験を表現している語りは、多様な形で幾度となく見出せる。

筆者：その食事をしていたときにこういうものがあつたら、できてたらいいなっていうことありますか？

M：(中略) 家庭だったら洗うのはお母さんかお父さんか分かんないけど、そういうのを当たり前に見て育つでしょ？でも、僕がいた所は調理師さんが洗うっていうのを見せてなかったから、要は終わったら帰っちゃうでしょ？(…) だって見に行く訳ないじゃん、わざわざ。だからそういう姿をみせてなかったのはひとつの、あんまりいい教育

表 3.1.1 NPO 法人日向ぼっこの沿革および活動内容

名称	NPO法人 社会的養護の当事者参加推進団体 日向ぼっこ	
沿革	2006年3月	施設で生活していた当事者らが主体となり、児童養護施設生活者の孤立防止とその声が養護や政策に活かされることを目指し発足
	2006年4月 - 2007年3月	社会的養護の現状理解などを目的とした勉強会を計28回開催
	2007年4月	新宿区中落合にサロンをオープンし、念願の居場所事業を開始
	2008年3月	社会的養護の認知を高めるため、社会的養護の当事者参加推進団体日向ぼっこに改名
	2008年7月24日	特定非営利法人格取得
	2008年8月	地域生活支援事業ふらっとホーム事業受託開始
	2009年4月	現在の文京区湯島にサロンを移転
活動内容	居場所づくり	児童養護施設や里親家庭で生活していた人が気軽に集うことができる「日向ぼっこサロン」を運営。毎月、座談会やイベントを開催し、居場所づくりの柱としている。
	サポート活動	相談援助活動 退所後の悩みや困っていることに相談にのりサポートする。
		進学・資格取得のための学習サポート 各種資格などを取得するための学習会を開催している。
		施設や里親家庭を巣立つ直前直後のサポート 退所直前直後の人たちに向け、経験談を語る催しを行っている。
	「児童養護施設や里親家庭で生活している・いた人の声」の集約活動	勉強会の開催・記録 行政が発表している社会的養護や社会保障に関する報告・方針を当事者視点で読む勉強会を定期的に関き、意見交換した内容等を意見書としてまとめ提出したりホームページ上で発表している。
		児童福祉施設への訪問 現在の暮らしや児童のニーズを把握できるよう、施設を訪問。
	「児童養護施設や里親家庭で生活している・いた人の声」の普及啓発活動	行政や援助機関への報告 児童養護施設や里親家庭で生活していた人から集まった声を行政や援助機関に届ける活動を行っている。
		催しや講演などの開催 シンポジウムや大学の授業等で社会的養護や日向ぼっこについて講演等を行っている。
		インターネットサイトの運営
		通信・出版物などの発行 正会員が執筆している広報誌「日向ぼっこ通信」などを発行しており、また、イベントや講演会で販売、活動経費としている。
リサイクル活動 寄附された物品を必要な人に譲るほか、フリーマーケットに出品し、売り上げを活動経費にしている。		
調査・研究活動		

じゃないかもしれない よね。だから自分が出して使ったらちゃんと片付けるんだよ、っていうかな。食べ物もそう だよって。

筆者：残しものはそのまま置いてたんですか？

M：バケツにボンボンって放り込んでたよ。

(Gr 1)

だったんですね。／／うん、そうだね。でも普通おうちって、なんか作ってたら「なに作ってんの？」みたいな感じで覗きにいったりするでしょ？／／W：匂いがしたり、音が聞こえて来たり。／／うん、そういうのが大事だと僕は思うね。

(…) 子供にとっては。

(Gr 1)

食事後の片付けや食べ残したものの処理などは実際に見て育たなければ知ることでもできず身に付かないことがこの語りより読み取れる。調理場が独立したつくりである施設では直接児童が調理場での行為を見ることはほとんどない。この語りの後には以下のような会話が続く。

さらにここではそういった調理場での行為が自然に目に触れる必要性が語られている。また、Mの発言からは、音や匂いが伝わる範囲での調理シーンが想像され、それによるコミュニケーションが発生する可能性があることが伺える。

筆者：調理する所っていうのは見れたんですか？

筆者：Mさんはどうですか？

M：見れるけど、そんなもん見に行かないよね。

M：買い物の記憶。僕はそこでは、基本的にお小遣いに関しては子供たちは自分で必要な時にその

／／W：じゃあ、結構調理場は独立してたつくり

表 3.1.2 インタビュー参加者の特性とインタビュー時間

グループ (インタビュー時間)	名前(仮)	年齢	施設入所年数	施設入所年齢	施設形態	定員		
Gr 1 (1:09:05)	W	24	1年	小 2	母子支援施設	世帯ごと		
			2年	小 4-5	大舎制	40人		
			4年	小 6- 高 3	GH	8人のち 6人		
	M	31	4年	中 3- 高 3	大舎制	50人		
Gr 2 (1:04:11)	K	34	2年	中 3- 高 2	自立支援施設	80人		
			C	28	1年	1歳	乳児院	—
					16年	2歳 - 高 3	大舎制	50-100人
	半年	—	自立支援施設	—				
T	21	4年	0-4歳	乳児院	—			
		16年	5歳 -20歳	大舎制	100人			
Gr 3 (36:05)	(W)							
	(M)							
	S	19	13,4年	5-18,19歳	大舎制	30人		
	(T)							
	(W)							



金額、ちょっと多めくらいのもをもらって買いに行くっていうシステムだから、日常に例えば、その、お母さんと一緒に買い物に行ってこの野菜買う、お肉買うっていうのは全くなかったね。ボンボンともものが勝手に出てくる。だから、なんていうのかな、お金も基本的に預けてるから、確かに金銭感覚はずーっといた子はちょっとずれてるなっていうのはありますね。で、あと、僕は自分の形成に影響があったって思うのは、そういうところにいるとなかなかものを買ってもらえないんですね、お金がないから。とすると、必死になっちゃうんですよ、買ってもらうときは。だから、より選んで。選んで選んで選んで選んで、絶対間違いないっていうやつを買ってもらうんだね。

(Gr 1)

Mからは一般の家庭との比較によって語られる施設での生活体験についての発言が多くみられる。ここでは、日常的に一緒に買い物に行くような機会はなく、したがって施設での入所年数が長い程金銭感覚がずれているかもしれない考えを語った。また、買ってもらえるものが限定されていたため自分の欲しい物について熟考していたことも述べている。

筆者：洗濯ってどうしてたんですか？

M：洗濯物をためる場所があって、一気に洗って、一気に干してって。

筆者：自分達で干すときは？

M：そこに関しては普通の子よりかはできると思

うよ。だって毎日しなきゃいけないから。

筆者：そうですね。一般家庭だとただ洗濯物を出しておけばお母さんとかが洗ってくれるっていうイメージがありますね。

M：うん、だからそこに関しては他の子より恵まれてたかもしれないね。スパルタかもしれないけど。

K：私も自分でやってみました。洗濯板使って下着とか下洗いして。

(Gr 1)

この語りからは、洗濯を否が応でも自分で行わなければならないという施設での決まり事とともに、そのような習慣に関して一般家庭で育つ児童よりもできることが多く、恵まれていたという発言がみられる。それに対してKも下洗いをしていたと同意しており、自分のことをできる限りするという施設での生活が垣間見える。

筆者：じゃあ、その時に例えば一緒に作ってみるだとか（…）

C：いや、うちは全部下で調理場でおばさん達が作ってくれてたんで。

筆者：じゃあ、作ってる所が見えたりはしなかった？

C：あー、まあ、覗けば見えましたが、そんなに見たりはしなかったですね。食堂も用がないとあんまり入れないんで。

筆者：じゃあ、作ったことはない？

C：まあ、多少誕生日会とかでは手は加えますけど。そういう時は調理場で作ってもらわないで、

その、寮ごとでつくってましたけど。それ以外は  
うちは全部調理場でやってましたね。// T:  
うち、調理場と食堂が繋がってたから、下の扉を  
くぐると調理場に行けるの。//

W: 調理してた? T も。

T: うん。でもうちは調理実習みたいなのがよく  
あった。なんか、あるよね、そういうのね。なかっ

た? // C: うちはない。// うちがあった。

W: [笑] 料理クラブとかある施設さんもあるよね。

T: 調理実習は1ヶ月に2回とか3回とかあった。

// W: へー。結構あったんだね。// でも基  
本的に食堂のおばちゃんが作ってくれた。

C: まー、そのために雇ってるからね [笑]

(Gr 2)

施設における調理体験は、施設のプログラムに  
よって児童にその機会が与えられるかどうか左  
右される。筆者が調理に関して聞いた質問に対し、  
Cはあまり意欲的に答えていない。一方、Cの調  
理場の話を聞き、Tが自分の施設の調理場が食堂  
と繋がっている話を持ち出す。Tの発言より調理  
場を楽しい場所として感じていることがわかる。  
Tの調理実習の頻度に対するWの発言より、月に2、  
3度が頻繁であると捉えている。この一連の語り  
の中でも、Cは一步距離をとった発言をしており、  
調理体験のなさを強調している。

このようなCとTの調理体験の話聞いていた  
Mが発言し、次のような語りがあらわれる。

M: でも、僕もその不安は感じてたから、キャベ  
ツの千切りは手伝わせてって自分から言ったこ

とはあるよ。

W: へー。

筆者: そこはやらせてもらえたんですか?

M: うん、そこは仲良かったから。// T: 仲良  
くしとけば損はないよね。//

(Gr 2)

ここでは、Mが調理を全くやったことのない自  
分に不安を感じ、調理員に調理体験をさせてもら  
えるよう頼むというエピソードが語られている。  
自ら積極的に行うことで生活体験をすることは可  
能といえるが、Wの発言やほか二人が特に反応し  
ていないことから、やはり機会の少なさが伺える。

C: 食事 [の材料] に関しては、誕生日の時のや  
つは一緒に買い物に行けたけど、他の食事は一  
緒に行けなかったんで、うちは。だから誕生日会  
の時の買い出しはついていったけど普通のはな  
かったですね。

T: うち全然なかったです。全部用意されてた  
ものだった。

筆者: 買い物行ってないとももの値段とか分から  
ないっていう声が [アンケートで] 多く聞かれた  
けど。

T: うちもー。全然分かんないよね。

C: うん。

T: ほとんど出来てんのが、買って来てもらえん  
のが当たり前、みたいな感覚だから。自分で買うっ  
て言う感覚がないよね。

C: だから小遣いで買うものは分かるけど、そう  
いうのは分かんないよね。// T: 小遣いで買う

ものはお菓子とかだよ。／／C：小遣い少ないからどういもの買うかすごい考えないとね。／／T：そうそうそう。自分で買う感覚はないかも。／／

Cは買い物においても、調理と同様、誕生日という特別な行事にしか行っていない。Cのそのときの発言より、もっと行って見たかったという気持ちを伺い知ることができる。後半部の語りより買い物にあまり行っていないことでもの値段が分からないこと、自分でものを買う感覚というものがないことなどに現在の生活への影響がみえる。また、与えられる小遣いが児童の利用可能な範囲を決めており、買うものも非常に限定的になる。

この語りには、以下のような会話が続く。

筆者：施設を出て困ってることは何かありますか？

T：超ある、あたし。まず、電車に乗れないこと。

／／C：それは俺は大丈夫だな。／／

W：切符とかね（…）／／T：そう、切符が買えないの。どこ行くにも車とか、職員が送ってくれるのが当たり前だから、電車に乗れないの。乗り方も知らないし。だってあたし15歳まで電車乗ったことないんだよ。／／

C：俺もアウトドア派だったから、結構色んなところ行ってたけど。

T：全然分かんないの、ほんとに。全部車で移動だから、ほんとに。だから、茨城から東京に来る

時に、電車に乗ったんだけど、分かんないから逆方向乗っちゃったりとか。分かんないんだけど、人に聞かないの。自分で勝手にやっちゃうから。／／C：自分は結構昔からどこ行っても平気。道に迷わない。電車の乗り方も分かるし、初めてじゃないし。

(Gr 2)

筆者が値段が分からないことについて他に困っていることがないかという意図の問いに対して、Tは電車の乗り方について答えている。Tの発言が買い物と同様の表現になっていることから、職員にしてもらうことが当たり前となっており、同じような感覚で捉えていることがわかる。一方、そんなTに対してCは積極的に自分がさまざまな場所にでかけていたことをアピールしている発言が伺える。語り手同士の対比が観察されている。

C：あー、お金が自由に使えるからね。結構欲しいものぼんぼん買っちゃう [笑]

W：Cはすごいお金の使い方だもんね。

C：[笑] うん、施設はすごいお金ないし、服とか買うのも限られてたから（…）。自分はもう欲しいもの買って。あと、施設にいるときは管理されてたから、まだあれだったけど、そういう縛りがなくなっちゃたから後先考えずに使っちゃうっていうのはあるかな。／／T：あー、確かに。／／

(Gr 2)

施設で自由に使える金銭は非常に限定的であり、また金銭管理は施設（ここでは職員を指して

いると思われる)が全般を担っている。そのため、退所後、買い物体験の少なさから値段の把握ができていないことも相まって、計画的に使えないことがわかる。

C: 逆に洗濯とかはあんまり自分でやってなかったな。洗濯は自分ではできなかったからね。//

T: え、中学生になっても? //

W: 中学生になったら自分で (...) // T: 小学校6年ぐらいから自分でやってたよ。// だいたい、そうだよな。

C: 最初はまとめて洗濯されてたから。小学生ぐらいまでは全部、もう脱いだやつはかごにいれとけばいいだけだったから。// T: うち、絶対小学校4年生ぐらいの時に、皆と洗濯物一緒に洗われるんの嫌だったから、自分でやるって言って全部自分でやってた。//

(Gr 2)

Cの洗濯を自分でやっていないという発言にTとWが驚き、反論する語りである。Wが中学生から、Tが小学6年生頃から自分で洗濯をするものだと主張するのに対し、Cが施設での方針を伝えるものの、Tは自分でしていたことを改めて主張している。

施設での生活体験はその機会の頻度に多少差はあるものの、基本的な生活の仕方を身につけるための指導はある程度の年齢になったら行っている。このような体験を、一般家庭での生活と比較しながら、次のような語りの中でその印象を語っている。

W: 逆に洗濯とかって中学生ぐらいになったら、自分でするようになるんで、逆に普通の家で、20代とかになっても親に洗濯してもらってる人とか、ちょっと気持ち悪いな一って感覚が。

C: うん、小学校5,6年、下手したら4年ぐらいからやるもんね。中学になったらもう、「洗濯やるよー」って。

(Gr 2)

Tが靴下の下洗いをしているという話題に対してCも下洗いはしていたと話したあとの語りである。いわゆる大人や社会人と呼ばれる年齢になっても洗濯という基本的な生活習慣を他者にしてもらっているひとへの嫌悪感が二人の会話から読み取れる。

筆者: なんか施設にいたときの買い物と、例えば施設出てからの違いってありますか?

S: んー。

筆者: 例えば、一人暮らししてから買い物の仕方が分からないとか、こんなにお金がかかるとは思わなかったとか。

S: あー。確かにそれはあるな。とりあえず電気代と受信料と (...), えーって。こんなにするのって。あとは、医薬品とかそういうのは自分で必要な時にちよくちよく買いに行とったからそんなに値段のギャップとかは無かったんやけど。

筆者: 食材とかは?

S: 食材とかの値段自体も、自分は結構買い物に行くのがそういうスーパーとかやったから、値段自体は知とったで。